

は「現代」のものの展覧会を行っている。今回の講演は吉本氏が編集したビデオを自ら解説。

●インドネシア染織の代表的なものはバティック (Batik) とイカット (Ikat) とソンケット (Songket) Batikは一般にはジャワ更紗と呼ばれ、16世紀ジャワ更紗は始まる。ジャワでは地域や民族などにより異なる技法がある。バティックの様子は特定の家や階層ごとに決っていた。斜め構成の柄や金更紗は特殊階層の人々のためのもの。

Ikatはタテ縞が多いがヨコ縞はスマトラ、ジャワ、セレベス、ロンボックでタテ、ヨコ縞はバリ島のテンナガナンで作られている。Songket (浮織り)はスマトラ西部の金糸、銀糸をヨコ糸に織ったもの、南部のクロエ地方の船の文様を表わしたもの、スンバ島のものなど。

●「作り手=使い手」他の染織と違い近年迄、各家で自製されてきた。特に縞は商品として扱われてこなかったことが伝統が引き継がれてきた理由にもなっている。

●インドネシアのクリエイター 「イワンテルター」の創作活動はファッション～インテリア空間の演出まで幅広い。中部ジャワの古都ジョックジャカルタの「ソロ地区」には「ビンハウス」というショップがある。この地区では今ながらの色づかいや、地紋入りの繊細なローケツ模様を表現し手仕事の良さを継承しているクリエイター「ジョセフィンコマラ」絹の更紗の四角い布を感性によって着こなすことをアピールしている。

●インドネシアのデザインは「偉大なるアレンジメント」
インドネシアのネイティブは多国籍。ジャワ、スーダン、中国、インド、アラブな

どの影響を受けている。民族も200を超え、多くの島々が5,000kmに渡って点在する。従ってそれぞれの独自性を持っている。ジャワとバリでは大変異なる。更紗のデザインソースをたどるとネシアのオリジナルなものではない。ヨーロッパ、中国、アラブ、日本からなど外から持ち込まれたデザインがアレンジされてきた。ジャワ更紗と言われるが元々のオリジナルではない。染織の歴史はこういう側面を持っている。

2.豹変するインドネシアン・テキスタイル

●伝統的な生産技術の斜陽化と再生

日本のテキスタイル産業が手工芸からインダストリー化されたと同様、同じ道をたどっている。手描きからプリント量産へ。

●服飾文化の洋風化とテキスタイル

世界的に見る傾向として「ファッション化」が進んでいる。着る技術の変化、伝統的な四角い布を着装する技術を継承していくのは難しくなっている。日本の着物も桃山、元禄から変わってはおらず「フレキシビリティ」が特性になっているが着る技術はなくなっている。

●国家とエスニック・アイデンティティ

ネシアでは日常的なスカートやシャツに伝統的な更紗柄や金彩をほどこしたモノが多く民族性のアイデンティティは強い。

3.インドネシアン・テキスタイルの特質

●アレンジメントとフレキシビリティ (柔軟性) 及びインドネシアと日本の異同について説明戴きました。

* 実際にはスライドを自らもっと詳しく説明戴きましたが紙面の都合で要約しました。

レポート [杉山哲三]

分科会

これからのテキスタイルが抱える諸問題

これからのテキスタイルが抱える諸問題

- A. 制度からみた問題 「記者からみた伝統染織と知的所有権」 座長 織研新聞社 編集委員 徳地 昭治氏
B. 技術からみた問題 「伝統技術と現代の生活との関わり」 座長 国立民族学博物館 助教授 吉本 忍氏



分科会 [A]

制度からみた問題「記者からみた伝統染織と知的所有権」

専門紙の編集委員は業界では3年前からスタート。京都の在住ということで日本の伝統的産業としての「きもの」を見てきた。

吉本忍氏の基調講演にもあった通り、テキスタイルデザインのルーツにはオリジナリティーは薄い。更紗のデザインソースをたどるとインドネシアのものはない。ヨーロッパ、中国、アラブ、日本など外からもたらされたデザインがアレンジメントされたもの。しかし今日では「知的所有権」がクローズアップされてきているが、自分も含め一般的知識しかもっていない。

●現在は既存分野より「際」の時代。学際などキワを極めた人がクローズアップされる。

●デザインの新規さ、獨創性など、歴史を遡っていくと何にもない。全くの獨創はない。94年4月から「知的財産権」について特集連載した。この中では他人の真似、輸入してもダメ。悪徳企業に対しては1億円の罰金が課せられる。